

車争ひ

六条御息所は前春宮妃であったが、光源氏をひそかに通わせるようになっていた。しかし、御息所は不安定な光源氏との関係に苦しみ、光源氏の愛情を頼みにならないと思っていた。

源氏二十一歳の時、桐壺帝が朱雀帝に譲位したことに伴って、伊勢の齋宮と賀茂の齋院も交替することになった。葵祭に先だつて行われる新齋院の御禊（禊の儀式）の行列には、光源氏も特別にお供をする。そこで、大勢の人が光源氏の姿をひとめ見ようと集まった。六条御息所は、齋宮となった娘に付き添って伊勢に下ろうと思いつつも、光源氏に対する執着心を捨てきれずにいた。

大殿には、かやうの御歩きもをさをさし給はぬに、御心地さへなやましければ思しかげざりけるを、若き人々、「いでや、おのがどちひき忍びて見侍らむこそ、はえなかるべけれ。おほよそ人だに、今日の物見には、大將殿をこそは、あやしき山がつさへ見奉らむとすなれ。遠き国々より、妻子を引き具しつともまうで来なるを、御覽ぜぬは、いとあまりも侍るかな。」と言ふを、大宮聞こしめして、「御心地もよろしき隙なり。候ふ人々もさうざうしげなめり。」とて、にはかにめぐらし仰せ給ひて見給ふ。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出で給へり。隙もなう立ちわたりたるに、よそほしう引きつづきて立ちわづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思ひ定めてみなさし退けさする中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなど由ばめるに、いたう引き入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたる気配するく見ゆる車二つあり。「これは、さらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず。」と、口強くて手触れさせず。いづ方にも、若き者ども酔ひ過ぎたち騒ぎたるほどのことはえしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は、「かくな。」など言へど、えとどめあへず。

齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出で給へるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言はせそ。大將殿をぞ豪家には思ひ聞こゆらむ。」など言ふを、その御方の人も交じれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。つひに御車ども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻などもみな押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に来つらむと思ふにかひなし。

ものも見で帰らむとし給へど、通り出でむ隙もなきに、「事なりぬ。」と言へば、さすがにつらき人の御前渡りの待たるも心弱しや、笹の隈にだにあらねばにや、つれなく過ぎ給ふにつけても、なかなか御心づくしなり。げに、常よりも好みととのへたる車どもの、我も我もと乗りこぼれたる下簾の隙間どもも、さらぬ顔なれど、ほほ笑みつつ後目にとどめ給ふもあり。

大殿のはしるければ、まめだちて渡り給ふ。御供の人々うちかしまり心ばへありつつ渡るを、おし消たれたるありさまこよなう思さる。

影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる

と、涙のこぼるるを人の見るもはしたなけれど、目もあやなる御さま容貌のいとどしう出で栄えを見ざらましかばと思さる。

(葵)

この事件で、六条御息所は深く傷つき、もの思いに沈むようになる。懐妊中の葵の上は物の怪に悩まされ、命も危ぶまれるようになった。産室に入った光源氏は、自分を見上げて涙する葵の上の声、気配が六条御息所のそれであることに気づき愕然とする。この後葵の上は男児（夕霧）を出産したが、急逝した。一方、六条御息所は、生き霊となり葵の上に取り憑いたわが身のいとわしさに思い悩んだ末、光源氏への未練を断ち切り、齋宮となった娘について伊勢に下向した。

【口語訳】

左大臣家の姫君（葵の上）におかれては、このようなお出かけもほとんどなさらないうえに、（懐妊中で）ご気分までも悪いので（新斎院の御禊の行列を見ようとは）思いもおかけにならなかったが、若い女房たちが、「はてさて、私も（だけ）がひっそりと見物しましても、何のおもしろみもないでしょう。（光源氏と縁のない）世間一般の人でさえ、今日の物見には、まず源氏の大将殿を、山里の卑しい身分の者までも拝見しようとしているそうです。遠方の国々から妻子を連れてまで（光源氏を拝見しに）参上するそうですのに、御覧にならないのは、全くあんまりでございますよ。」と言うのを、（葵の上の母君である）大宮がお聞きになって、「（葵の上の）ご気分もまずまずという折です。お仕える女房たちも物足りなさそうな様子です。」とおっしゃって、急に（葵の上のおでかけの準備をせよと）おふれをお返しになって（葵の上は）物見をなさる。

日が高く昇って、（身分に応じた外出の）作法も格式ばらない様子で（葵の上一行は）お出かけになった。隙間もなく（物見の牛車）立ち並んでいるので、（葵の上の一行の車は）美しく列をなして車の立て場に困っている。身分の高い女性の乗った牛車が多く、（その中で）供人の付いていない隙をねらってみな立ちのかせる中に、網代車で少し古びているのが、下簾の様子など趣ありげなのに、（乗り手は）ずっと奥に引っ込んで、（簾の外に）わずかに見える袖口、裳の裾、汗衫などの、色合いがたいそう美しく、わざと目立たないようにしている様子のはっきりとわかる車が二台ある。「これは、決してそんなふうには立ちのかせなどしていいお車ではない。」と、（その従者が）強く言い張って（葵の上の供人に）手を触れさせない。どちらの側にしても、若い者どもが酔いすぎて騒いでいる時のことは抑えきることができない。年輩の（葵の上の）先払いをしているお供の人々が、「このような（乱暴な）ことをするな。」などと言うが、抑えきれない。

（実はこの車は）斎宮の母君である六条御息所が、もの思いに乱れていらつしやるお気持ちの慰めにもなるうかと、人目を忍んでお出かけになっているのであった。（素性を隠して）何気ないふうを装うが、自然と（葵の上は相手の素性に）気づいてしまった。「その程度の立場であっては、そんなことを言わせるな。大将殿（光源氏）を権勢家と思申し上げているのだろう。」などと言うのを、（葵の上の供人の中には）光源氏に仕えている人も交じっているので、（六条御息所を）お気の毒だと見ながらも、仲裁するというのもめんどうなので、知らぬ顔をする。とうとう（葵の上の）お車を列をなして止めてしまったので、（六条御息所の車は）お供の女房の乗った牛車の奥に押しやられて何も見えない。不愉快なのは言うまでもないとして、このような忍び姿をそれと知られてしまったのが、ひどく無念なことはこの上もない。榻なども全部押し折られて、なんの関係もない車の車輪の轂に（轆を）掛けてあるので、この上なくみっともなく、悔しくてなんで（こんなところへ）来てしまったのだろうと思うが（いまさら）どうにもならない。

（六条御息所は）見物もしないで帰ろうとなさるが、通り抜ける隙間もないうちに、「行列が来た。」と言うので、それでもやはり冷淡な人（光源氏）のお通りが待たれるのも心の弱いことよ、（笹の生い茂った物陰であれば馬も止まるのだろうが）笹の隈でさえもないからだろうか、（光源氏が馬も止めず）何気なく通り過ぎなさるにつけても、（なまじちらつとお姿を拝見したばかりに）かえつてもの思いをなさることである。なるほど、例年よりも趣向をこらした数々の車の（女房が）、我も我もとこぼれそうに乗っている下簾の隙間隙間に対しても、（光源氏は）素知らぬふりではあるが、（車の主をそれと知ると）ほほ笑みながら流し目でご覧になることもある。左大臣家の（車）ははっきりしているので、まじめな顔つきでお通りになる。（光源氏の）お供の人々が（葵の上の車の前では）かしこまって敬意を払って通り過ぎるので、（六条御息所は）圧倒された（自分の）様子をこの上もなく（みじめに）お思いになる。

影を宿しただけで流れる御手洗川のようにその姿を遠くから見ただけの源氏の君のつれなさゆえに、川面に浮かぶよ

うなわが身の憂さ（不幸）がいつそう思い知らされたことです。と、涙がこぼれるのを（同乗している）女房たちが見るのもきまりが悪いが、まぶしいほどの（光源氏の）お姿、ご容貌がますます晴れの場で一段と見栄えのするのもし見なかったとしたら（心残りであっただろう）とお思いになる。